

教員としての資質の育成に関する実践的調査研究 ——表情から始まるコミュニケーション能力の向上——

鈴木 郁子¹⁾

A Research for Practical Method to Foster Youngsters' Abilities to be a Teacher Facial Expression Leads Better Communication

SUZUKI Ikuko

要 約

変化の激しいこれからの社会を見据えて、近年、保護者や国民の間に、学校に対して、必要な学力や体力、道徳性等を確実に育成する質の高い教育を求める声が高まっている。これからの学校は、子どもたちの知・徳・体にわたるバランスの取れた成長を目指し、高い資質能力を備えた教員が指導に当たり、活力ある教育活動を展開することが必要となる。そこで、将来の教員を目指す学生を対象に、彼らのコミュニケーション能力を高める支援のひとつとして、写真画像を用いた自己追求プログラムの実践を行い、結果の検証を試みた。自分の表情を意識して、笑顔で挨拶をする実習体験を行うと、人前で話すことに対する不安感を軽減し、自信度を上げる効果がもたらされるということが分かった。

I. 問題と目的

2006年12月に、教育基本法が約60年ぶりに全面改正され、教育のあるべき姿や目指すべき理念の見直しがなされた。それを受けて組織された教育再生会議は、第一次報告として「社会総がかりで教育再生を一公教育再生への第一歩」を示し、初等中等教育を中心に7つの提言と、教育再生のための緊急対応として「学校教育法」を始めとする教育3法の改正を提言した。中央教育審議会と国会における集中的な審議を経て、2007年6月には「学校教育法等の一部を改正する法律」が公布された。戦後の日本における教育の大変革である。

その背景には、1990年代半ばから現在にかけて顕著になった、いわゆる「知識基盤社会」(knowledge-based society)と言われる社会の構造的変化やグローバル化がある。変化の激しい社会の中で次代を担う子どもたちを育てる営みである教育に対して、

その在り方に加え学校教育の成否におおきく関わる
ところの教員の資質が厳しく問われるところである。2007年1月の教育再生会議第一次報告「社会総がかりで教育再生を一公教育再生への第一歩」とした提言の中に、『教員の質の向上のためには、あらゆる手だてを総動員し、魅力的で尊敬できる先生を育てる』とした内容が明示されている。

他方、教育界の現状をみると、今後進むベテラン教員世代の大量退職時代を迎えて新任教員の割合が増加する中、学校現場では不登校・ひきこもり者への対応、いじめ、万引き等を始めとする問題行動に対する指導、保護者との連携の難しさなど、日々適切かつ緊急な対応が求められる課題が山積しており、優れた資質能力を備えた魅力ある教員の確保がますます重要となっている。また指導力不足教員に対しては研修制度が始まるなど、教員としての資質や力量の問題がおおいに注目される時代となってきた。

法令改正を受け、文部科学省は「魅力ある教員を求めて」、ついで2009年9月には「教員を目指すそ

1) 児童教育学科

う！」と題した小冊子を作成し、関係諸機関に配布をした。進路を考えるための資料として活用されることをねらいとしたもので、教職の魅力や教員となるための方法等について紹介している。また、教員の職責と資質能力の重要性にもふれ、『質の高い教材を使っているだけでも教え方が変わるれば、その教材の価値を引き出しているとはいえません。また、子どもたちにとって貴重な体験を得られる機会があっても、教員自身が目的意識をしっかり持って実施しなければ、教育的な効果は期待できないでしょう。このように、責任が重い教員の仕事です』(文部科学省、2009)としている。「教育は人なり」といわれるように、学校教育の成否は教員の資質に負うところが極めて大きく、特に、学校教育を巡る様々な課題への対応のためには、すぐれた資質能力を備えた魅力ある教員が必要とされている状況がまさに述べられている。

青木・林・鈴木(2004)は、愛知県内の県立学校における教員の資質向上に関わる資料をまとめた。また、鈴木(2008)は、これからの教育を担っていく教員に求められる専門性や資質の充実をはかる要素を、現場から収集した資料をもとに考察を試み、「特別支援教育を支える教員像について」としてまとめ、現場において必要とされる資質、能力をそなえた教師像を示した。本研究は、魅力ある教師をめざして自己の資質能力の向上を図る一方策としての学生指導・支援プログラムの構築とその検証を目的とした。

Ⅱ. 学生に対する質問紙調査

1. 事前調査の実施

調査対象：大学2年生 80名(男性66名、女性14名)

調査時期：2009年4月

調査方法：下記の項目について、質問紙を用いた自記式調査

- ① あなたは人前で話をするとき、自信を持って話せますか。
- ② これまでにグループや組織のリーダー役を経験したことがありますか。
- ③ 人前で自信をもって話すためにはどんな要素が必要でしょうか。
- ④ 初対面の相手に好感を得るためには何が大切だと思いますか。

①の回答選択肢は、「ある」～「ない」の4件法、②は有無を問う2件法とし、③、④はあらかじめ要素を列記しておき、最も重要だと思うものを2つまで選んで記述するように指示をした。(項目については Figure 1、2を参照)

2. 質問紙の集計結果

人前で話をするときの自信の有無について聞いたところ、「ある」(7名)・「ある程度ある」(33名)とした群(肯定群 40名)と、「どちらかというとなない」(25名)・「ない」(15名)と答えた群(否定群 40名)は同数であった。男女別では、男性肯定群33名・男性否定群33名、女性肯定群7名・女性否定群7名と共に同数であった。自信度の段階においては、「ある程度あり」が最も多く、男女共に40%以上を占めていた。ついで多い回答は「どちらかというとなない」であり、「ない」「あり」と続く。この傾向と割合は男女別にみても同様であった(Table 1)。

リーダー役の経験の有無では、70%以上の学生は、これまでの学校生活や地域活動場面でなんらかのまとめ役を経験してきている。しかし、その体験は、必ずしも人前で話すことへの自信には結びついていないようである(Table 2)。

Table 1 人前で話す時の自信の度合

自信の度合		全体（人）	男性（人）	女性（人）
ある	肯定群	7（9％）	6（9％）	1（7％）
ある程度あり		33（41％）	27（41％）	6（43％）
どちらかというとな	否定群	25（31％）	20（30％）	5（36％）
ない		15（19％）	13（20％）	2（14％）
合 計		80（100％）	66（100％）	14（100％）

Table 2 リーダー役の経験の有無

リーダー経験	全体（人）	男性（人）	女性（人）
有	61（76%）	51（77%）	10（71%）
無	19（24%）	15（23%）	4（29%）

次に、「どんな要素が自信につながると考えているか」についての質問に対しては、Figure 1 の回答を得た。自信の表れとして、「声の大きさ」に着目している学生が一番多い。人前に立ったとき、自信が持てずに消極的な姿勢になると自ずと小声になりがちなのは、普段目にすることであり、「声の大きさ」と自信の有無とは関連性があるととらえている。その他の要素として選択数の多い項目は、「話の内容」、「表情」、「話すときの姿勢」と続いた。

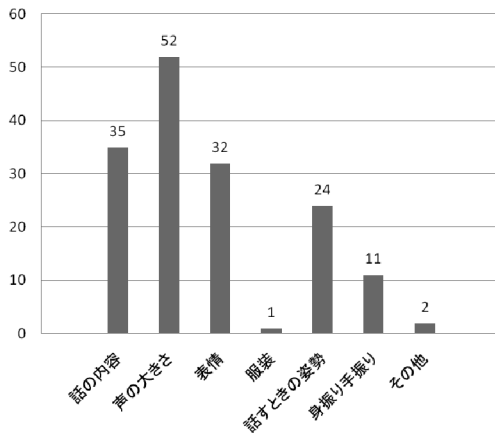


Figure 1 自信を持って話すための要素

対人関係は、最初の印象が大切とよく言われるが、佐田ら（2007）は「顔から生じる第一印象は、瞬時に判断され、その後の認知的判断や行動に潜在的に影響を及ぼす」と述べている。このように、顔から生じる第一印象は大切であることから、「顔の表情が大切である」とする学生の回答は経験的に理解していることを示している。

「初対面の人と出会う際に好感を得るための要素は何が大切と考えるか」との質問には、「表情」が大切と感じている学生が他の項目に比して、非常に多いことが分かった。その他、選択数の多い項目は、「丁寧な言葉づかい」「声の大きさ」「語彙力」「服装」と続いた（Figure 2）。

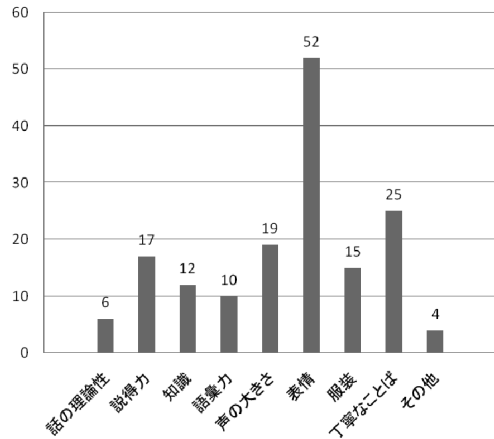


Figure 2 好感を得るための要素

Ⅲ. 学生指導・支援プログラムの作成にあたって一顔学における知見と結びつけて

質問紙による調査結果から、「表情」が人前で話す際の自信度を示す要素として、また好感を得る要素として大切とする学生が多いという実態が分かった。

「顔」について村澤（1999）は、「日本人は感情をストレートに表情に表わすことができない。これはやはり古来からの『顔隠しの文化』に由来すると思える。内面に根ざした文化はそう簡単に変えられるものではない。しかし少しでも相手に理解してもらうためには、内面も思い切った変革が求められているのかもしれない。まずは、自分たちの顔の特徴をよいところも悪いところも含めて自覚することからスタートするのがよいだろう」と述べている。また上田・須賀（2007）は、「顔は社会的コミュニケーション場面において重要な情報源である。特に、顔が何かしらの運動変化を表出した場合、われわれはそれを表情として認知する。表情を形成する顔の運動変化は、ある体系的な変化パターンに基づいている。そのため、人間が表出する表情には、感情に対応した定型的運動変化が認められる。（例えば、喜び表情における口角上昇という運動変化）」としている。佐田（2008）は「心地よい印象や落ち着いた印象はコミュニケーションや情報処理において促進的に働く可能性がある」と示唆している。

以上のことから、①学生自身が自分の表情を改めて見つめ直す作業②グループメンバーとの人間関係を深めるかかわり③コミュニケーション能力の向上

にむけた実習と体験活動の内容でプログラムを組んだ。体験活動では表情を意識し、相手の目を見てにっこり笑顔を向けることをポイントとした。日々の生活のなかで、笑顔を意識して周囲の人々と対応することで、新たに生じた人間関係の変化や、自己の内的変化にも目を向け、体験をとおして感じ取って欲しいと考えた。そして今回は「顔」をテーマとした写真画像を用いた自己追求プログラムを作成した。

IV. 画像を用いた自己追求プログラムの取り組み

先の実態調査を行った学生は、教員免許状取得を目指しており、全員が教職科目として開講されている講義を受講している。週1回、講義の後半の20分から30分を自己追求プログラムの取り組みにあて、4月後半から6月上旬にかけて連続6回、実施をした。実習にあたっては、80名を1グループ10名ずつの8グループ編成とした。

各回の内容は以下の通りとして自己追求プログラムの取り組みを進めた。

第1回 自然な姿の自分（静止画と連写）をカメラで撮影し、各自のパソコンにコピーする。

第2回 グループメンバーの表情と照らして自分自身の表情の良い点と改善点を確認する。
グループ内でメッセージを交換し合い、他者から見た自分とこれまでの自己のイメージとの違いを話し合う。

第3回 人間の表情のもつ意味について学ぶ。
①顔は何のためにあるのか②顔が果たす役割③顔から得られる情報が重要なわけ④なぜ笑顔が好まれるのかについて講義する。

第4回 笑顔の表情レッスンをする。
表情筋を意識して動かすことから始め、笑顔はゆっくりと口角を上げ、眼輪筋を使って下瞼を上にあげ頬を高くすることで表情が作られることを実習する。

第5回 体験活動の計画立案をする。
学生への提示は以下の内容である。

課題 実践してみよう「自分の笑顔で周囲がどう変わるか」

期間：2009年6月2日より2週間

対象：大学の先生、友人、部活の先輩、バイトの上司、大家さんも可

方法：相手を見たら、目を見て、にこっと笑顔をむける。

感謝の気持ちをもって「〇〇〇〇」と挨拶する。

（重要なことは、一度だけでなく、何度も繰り返し実践すること！）

第6回 笑顔の写真を撮り各自のパソコンにコピーした後、自然体で撮った写真と各自比較し、その変化を検証する。

第5回目に提示した体験活動が終了した時点で、下記の項目についての振り返りを行い、自由記述によるレポートの提出を求めた。

- 1 対象者
- 2 相手の反応……笑顔と挨拶を繰り返し続けることでどう変わっていったか
 - ・始めた頃の相手の反応はどうだったか
 - ・繰り返し続けたときの相手の反応はどう変わったか
- 3 自分の気持ち……自分と相手との間にどんな変化が出てきただろうか
 - ・始めた頃の自分の気持ちはどうだったか
 - ・続けていくなかで感じたことはなにか
- 4 繰り返し続けた後に相手との関係に起きた変化はあったか

V. 体験活動実践後の振り返りレポートのまとめ

1. 実践の対象者について

課題は80名全員から提出された。対象者は、各自で選ぶようにしたところ、1名から3名の範囲であげていた（Table 3）。その内訳は、同じ学科所属の日ごろあまり親しくはない同級生や他学部の学

Table 3 対象者の内訳

対象とした人	人数（人）
友人	63
バイト先の人	44
先輩	15
先生	13
家族	11
近隣の人	9
大学の職員	4
小学生・幼児	2

生、同じ学科の後輩等を対象に選んだものが全体の8割と大変に多い。また、バイト先の上司や仲間も半数以上のものが対象に選んでいた。その他、設問での例示以外に、両親や兄弟（家族）、近隣の人、大学の職員、ボランティア活動等で出会う子どもたちが選ばれていた。

2. 相手の反応について

挨拶を始めた頃には、友人・バイト先の人・先輩・家族からびっくりされたり、「何かいいことあったの」と驚かれたり、「急にどうしたの」とけげんそうに言われたなどの記述が多数見られた。（Table 4）これまでしてきたいつもの挨拶の仕方と違って、相手に視線をきちっと向け、笑顔を意識しているため、相手が戸惑いを感じた反応を返したものと読み取れる。しかし、繰り返し続けていった結果、相手の示す反応がいろいろと変化したとする感想を分類しTable 5にまとめた。

相手も挨拶を笑顔で返してくるようになったとするものが半数近くあった。また、挨拶をした後に楽しい会話が弾んだり、相手から先に挨拶をされるようになったりと、人間関係の深まりを感じさせる。バイト先の人との間では、積極的に話しかけてくれるようになったり、挨拶以外のことばも返ってくるようになったり、返事が返らなかった人からも挨拶が返るようになったりするなど、これまでうまく関わりがとれなかった相手であった人とのコミュニケーションが図られ、関係が改善されたとする報告もあった。

一方、かわらない、普段通り、あまり変な感じになって嫌がられたとする記述は4件あった。

Table 4 相手の反応（始めた頃）

相手の表情	人数（人）
驚いた様子・とまどい	43
普通に・普段通り	18
何となく笑顔	14
そっけない・視線をそらす	5

Table 5 相手の反応（続けた後）

相手の表情・様子	人数（人）
笑顔で答える	38
会話が弾む・増える	17
相手から先に挨拶	11
自然な雰囲気	9
挨拶が返る	5
変化なし・普段通り	1
嫌がられた	1

（複数回答を含む）

3. 自分の気持ちについて

最初は恥ずかしい気持ちがあって言いづらかったり、照れくさかったりしたと29名が記述しているが、だんだん緊張もとけて、相手から笑顔で挨拶を返してもらうことでリラックスできていったようである。その結果感じられた自分の気持ちの変化についての記述から、感情表現の言葉を拾い集計したものがTable 6である。

「にこっとして挨拶をすることがなかったので、始めは恥ずかしかったが、慣れてきたらすごく挨拶が楽しくなった」「自分は暗い人間だと思われていたけれど、最近は明るく接しられるのでうれしいです」「始めは緊張しており挨拶だけで精いっぱいだったが、続けていくと何となくすがすがしくなり、気

Table 6 自分の気持ち（続けた後）

感じられた気持ち	人数（人）
うれしい	20
気持ちがいい	11
すがすがしい	7
楽しい	7
いい気分	7
明るい	2
さわやか・おだやか・温か はなやか・晴れやか スカットする	各1

分が良くなった」「笑顔があると空気がほんわかと温くなる」など、自分自身の内的変化を肯定的にとらえているものが多数であった。

また、意欲や行動に関する表現としては、がんばろう（5人）、親しくなりたい（4人）、元気に過ごせそう（1人）という記述があった。挨拶をとおして意欲がわき、対人関係に対しても積極的な姿勢や態度が生まれていることがうかがわれる。

反対に「ちゃんと返してくれないことにショックとiraだちを感じた」「（課題なので）しぶしぶやっていた感じで慣れた人ばかりにやったから、今更と思った」「（日々）自然にやっていることのようなのであまりかわらない」「結構自然にやっていることのようなので、特に変わりはない」とする4件の感想もあった。これらの感想から、一部の学生には、自分の表情をさらによりよくするための実習とした意図が十分伝わっていなかったものと感じられた。

4. 相手との関係の変化について

Table 7に示すように90%以上の学生は、それぞれ対象とした相手との関係に良好な変化を見出している。具体的には「笑顔で挨拶することでここまで人との距離が近くなったことに驚きがかくせません。一緒にいて気を使うだけの相手が、一緒にいて楽しいと思えるようになった。これからは苦手な人とも“笑顔で挨拶”をすることで仲良くなっていきたいと思います」「我家は普段はあまり会話がありません。しかしこの実験を始めてから少し会話が増えた気がします。これからも毎朝挨拶をして家族に活気ができればいいと思います」とした感想が示しているところである。

挨拶を続けて、変ったところはないとした相手を見ると、友人や部活動の先輩や後輩たちであった。かなり親しい関係が構築された相手であって、すでに習慣化された挨拶や会話が形成されていて今更といったところであろうか。

Table 7 関係の変化

対人関係の様子	人数（人）
関係が深まった・親しくなった・距離が縮まった	74
特段の変化なし	6

VI. 質問紙による効果の測定

自己追求プログラム終了後2週間において、質問紙を用いた自記式調査による効果測定を行った。

質問項目は、①自分自身の表情を観察するのに写真を用いた効果、②笑顔での挨拶の実習をした効果、③人前に立つことへの不安感に対する自己追求プログラムの効果、④自信をつけることに対する自己追求プログラムの効果、とし、これらの質問に対して、「とても効果的だった」～「まったく効果的ではなかった」の4件法で回答を求めた。集計結果は以下の通りである。

写真を撮り、自分の表情の変化を確認した活動の効果では、「ややある」64%（52人）と、「とてもある」21%（17人）をあわせると85%（69人）の学生が、何らかの形で表情の印象度を上げることに役立ったとしていた（Figure 3）。

笑顔での挨拶を続ける実習を通して、それぞれ学生が体験した事柄や感想については、体験活動実践後の振り返り調査の結果のところでも述べたが、改めて効果の感じ方を聞いてみたところ、「とてもある」とするものが一番多く37人（46%）、つづいて「ややある」33人（41%）であった。70人（87%）のものが、実習体験は意味があり効果があったとする結果がでた（Figure 4）。

では、これら一連のプログラムを終えた結果、自身が感じてきた人前に立つことに対する不安を軽減することに効果的であったかという問いに対しては、「とてもある」20%（16人）、「ややある」47%（38人）、「あまりない」27%（22人）、「ない」3%（5人）であった（Figure 5）。

自信をつけることに対して効果的であったかという問いに対しては、「とてもある」19%（15人）、「ややある」44%（35人）、「あまりない」32%（26人）、「ない」5%（4人）とする結果を得（Figure 6）、前者の問いとほぼ同じ傾向であった。

最後に、事前調査の時点で約半数にあたる学生が人前に立った時自信が「ない」、もしくは「あまりない」と回答をしていたが、今回のプログラムは、この点に対して、自信をつける有効な手立てとなりえたかという観点からの検証を試みた。実態調査での「自信の有無」、「リーダー役の経験の有無」と、自

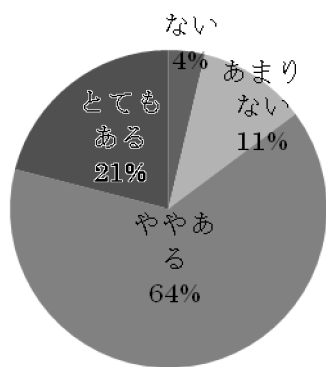


Figure 3 写真の活用効果

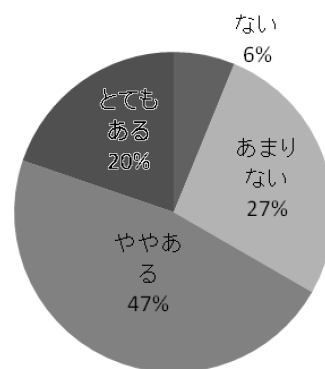


Figure 5 不安感に対する効果

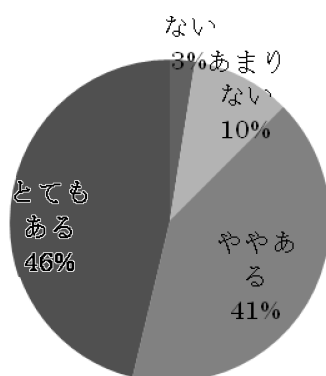


Figure 4 笑顔で挨拶の効果

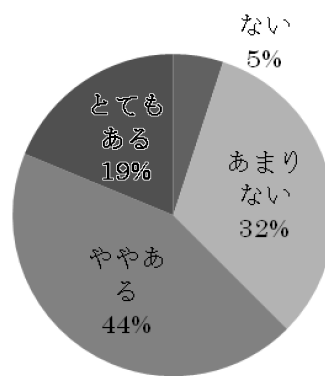


Figure 6 自信をつける効果

Table 8 質問項目間の相関

	自信のなさ	リーダー経験の有無	写真使用の効果	実践の効果	不安感の軽減効果
写真使用の効果	-.191	-.027			
実践の効果	-.154	-.120	.308**		
不安感の軽減効果	-.347***	-.114	.457***	.347***	
自信度上昇効果	-.207	.043	.546***	.281*	.681***

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

己追求プログラム終了後の効果測定調査での「写真使用の効果」、「笑顔実践の効果」、「不安感の軽減効果」、「自信度を上げる効果」の項目について、各項目間の相関係数を算出した（Table 8）。

事前調査での人前で話すことに対する「自信のなさ」と、プログラム終了後の「不安感の軽減効果」（ $r = -.347$, $p < .001$ ）との間に有意な負の相関が認められた。

次に、今回のプログラムのなかで「写真使用の効果」は、笑顔での挨拶の「実践の効果」との間に.308、「不安感の軽減効果」との間に.457、「自信度上昇効果」との間に.546と、ともに有意な正の相関が認められた。

笑顔での挨拶の「実践の効果」は「不安感の軽減効果」との間に（ $r = .347$ ）「自信度上昇効果」との間に（ $r = .281$ ）とそれぞれ有意な正の相関が認められた。

最後に「不安感の軽減効果」は「自信度上昇効果」との間に有意な正の相関（ $r = .681$ ）が認められた。

以上のことから、4月当初の時点で、人前に立つことに対する自信のなさを感じていたもののほど、自己追求プログラムによって不安を軽減する効果を感じる者が多く、このプログラムは不安を軽減することに効果的であったということが示唆された。また、写真を使用することと、不安感の軽減効果、自信度上昇との間に関連があることが示された。

VII. まとめ

教員の職務は、人間の心身の成長発達に深くかかわっており、子どもたちの人格形成に多大な影響をあたえるものである。ゆえに教員の資質能力に対しては、その質の高さと幅の広さやバランス感覚が求められることに加え、今日的な課題として、保護者や地域住民の意向を十分に反映することのできる信頼性も求められている。将来の職業として教員を志す学生たちは、児童生徒、保護者、地域住民、関係諸機関等各方面の人々から信頼されるにたる優れた資質能力を備えた魅力ある教員を志向して、多面的に自己の成長を図らねばならない。

教員の資質能力については、これまでの中央教育審議会等でしばしば提言がなされてきたところである。2005年の審議会答申「新しい時代の義務教育を創造する」では、優れた教師の条件として大きく集約すると「①教職に対する強い情熱、②教育の専門家としての確かな力量、③総合的な人間力」の3つの要素が重要であるとしている。今回の実践的調査研究においては、「③総合的な人間力」の一構成要素であるコミュニケーション能力の向上に焦点をあてた学生支援の在り方を検証した。良好な人間関係が構築されるその前提として、安心感や安定感、信頼感が生まれるよい表情をつくることの有効性に着目し、写真画像を用いて表情を視覚的にとらえる試みをした。自分の表情は他者には見えても、自分自身はほとんどの場合気付かず（意識せず）分らないことが多い。学生には写真を介して表情と気持ちが結びついていることに気付かせ、挨拶をする際には笑顔で対面することとして表情を強く意識させた。挨拶の大切さはこれまでも家庭や学校生活のなかで幾度となく言われてきており、だれしも分かりきっていることではあるが、事前アンケート結果に出てきた「好感を得るためには表情が大切」とした要素を明確に意識させ、体験をとおしてその効果を実感させることを意図した。「初めは、タイミングがわからず恥ずかしいという思いがあったが、気にせず目が合ったときに挨拶するだけで、なにかいつもより元気に一日が過ごせそうな気がしてくるようになった」「普通に挨拶するのではなく、笑顔で挨拶することによって、相手と親しくなりたいという

気持ちになりました」「作り笑顔ではなく、本当のやさしい笑顔でないと相手も心を開いてくれないと感じた」「堅苦しかった関係から、とても心地よい頼れる関係になった。何気ない毎日のなかで起きたことなので驚いているのが内心ではある」「バイト先の社員さんとは挨拶をするようになってから、お互いの悩みを相談できるまで仲良くなりました。このレポートは終わりですが、挨拶は引き続き行っていきたいと思いました。人見知りの私ですが、勇気をもって挨拶ができて本当に良い経験でした」と学生たちはそれぞれの体験をとおして多くのことを感じとっている。近年の脳科学研究の知見をもとに池谷（2009）は「脳は体を介して、自分の置かれた状況を把握する。理解して表現するのではなくて、まず身体で表現してみて、表現している姿を脳が知覚して、そして自分の内面を理解する」と述べている。このことと重ね合わせて学生たちの感想を見ていくと、笑顔で挨拶をすることで、相手のことが身近に感じられるようになったり、親しくなりたい気持ちがわいてきたり、挨拶が楽しくなったりすると述べていることは、表情筋の動きがあって脳が笑顔の自分を知覚し、そこで快の感情や意欲が連動していくととらえられるのではないだろうか。表情は意識をすれば、誰でも短期間に変化させることができるが、それに比べ、会話力・表現力の向上や話の内容を豊富にする力を高めることはすぐには望めない。笑顔で挨拶することで「人間関係が劇的に変化した」と語った学生の言葉は、このあたりの状況を象徴的に表しているものと思う。

本研究を足掛かりとして、今後も体験を重視した対人関係能力の向上を目指す学生支援に心がけ、学生自身が、意欲的積極的に総合的な人間力の育成を目指して取り組む授業研究を志向していきたいと考える。

付記

本研究は、平成20年度中部大学特別研究費（研究課題番号20ⅡL06C）の助成を受けて行った研究成果の一部である。

引用文献・参考文献

- 文部科学省初等中等教育局教職員課 2009 教員を目指そう 文部科学省
- 青木陸彦・林誉樹・鈴木郁子 2004 教員に求められる資質能力とその評価の在り方 平成 16 年度愛知県公立高等学校長研究会研究発表要綱 11-16
- 鈴木郁子 2008 特別支援教育を支える教員像に関する一考察 中部大学現代教育学研究紀要 Vol. 1 89-97
- 佐田由衣子・伊師華江・中原幸枝・赤松茂・行場次朗 2007 顔の印象が持つ加算的・非加算的特性の印象変換ベクトル法による検証 日本顔学会誌 Vol. 7-1 65-76
- 馬場悠男・金澤英作 1999 顔を科学する！ 多角度から迫る顔の神秘 株式会社ニュートンプレス
- 吉川左紀子 1998 コミュニケーションの中の表情（特集 顔学入門） 月刊言語 Vol. 27 18-25
- 教育再生会議 第一次報告（2007 年 1 月）社会総がかりで教育再生を 文部科学省
- 中央教育審議会 2006 今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）文部科学省
- 竹原卓真 野村理朗 編著 2004「顔」研究の最前線 北大路書房
- 山口真美 赤ちゃんは顔をよむ 2003 紀伊国屋書店
- レズリー・A・ゼプロウィッツ著 羽田節子 中尾ゆかり 訳 1999 顔を読むー顔学への招待ー 大修館書店
- G. リゾラッティ・L. フォガッシ・V. ガレーゼ 2007 他人を映す脳の鏡 脳から見た心の世界 part3 日本経済新聞出版社
- 池谷裕二 2009 単純な脳、複雑な「私」朝日出版社

受付日 2009 年 9 月 30 日

受理日 2009 年 11 月 18 日